

印象派の画家たち フランス

絵画の歴史を学んだわけではないが、洋の東西を問わず絵の歴史は宗教画に始まったのではないかと思っているが……。イスラム教は偶像崇拝を厳禁しているため、唯一絶対の神アッラーは無論のこと人間や動物さえ絵や彫刻に刻むことを禁じている。それでも草花をデホルメした模様や幾何学模様はイスラム教寺院や建築物を美しく飾っている。

一方仏教に見る曼荼羅や仏像、キリスト教、ヒンズー教も神と崇める姿を絵画や彫刻に表している。文字の読めない人たちへの理解を深めるためもあって、神は言うに及ばず教義の寓話など様々を題材に絵を描き縁なき衆生を啓蒙している。中世の頃のイタリア、オランダ、スペインを見ると歴史に残る傑出した画家たちを数多く輩出している。

ところが近世になると印象派の画家たちがフランスに雲霞のごとく集まってきている。彼らは何に引き付けられ集まってきたのであろうか。

中世の絵画は肖像画、そして歴史や聖書をモチーフに描かれているものが多いが、なかには何を訴えたいのか描いた意図がくみ取れないことがある。例えば若い女性がたくましい男の首を切り落とし、鮮血の滴る生首を持つなどの衝撃的な絵画はキリスト教徒でない異教徒にとっては凄まじい絵だと思ふ以外全く理解できない。聖書や歴史上の故事来歴を知らないと、絵に対する理解の深みがまるで違うように感じるのである。その点印象派の描く絵は見たまま感じたまま、まことに親しみやすい。素人目からすると見た目に美しく楽しめる絵画それが印象派の描く絵であらうかと思うのである。

中世から続く絵画の描き方には決まりごとがあって、モチーフや描く場所も野外ではなく屋内でなど絵を描く基本が定められていた。

フランスには絵画界に大きな影響力を持った「芸術アカデミー」という国家機関がある。芸術アカデミーは自然をテーマとする風景画は認めず、また人物の描かれてない絵は価値が低いとしてきた。印象派の描く作品はこの基本を打ち破り画家の気持ちの赴くままに自由な描き方をした。

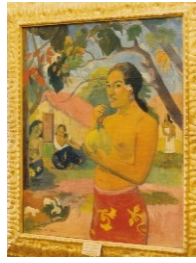
印象派とは19世紀にフランスの画家たちが起こした、絵の世界の革命といえようか。印象派の画家たちが描く絵は、最初は評価されず絵を買い求める人も少なかったが、徐々に市民に印象派の絵が買い求められていくようになっていくのである。

そもそも印象派という言葉は、評論家のルイ・ルロワがモネの描いた絵の題名「印象・日の出」からモネの仲間たちを印象派と呼んだことに始まるのである。

よく知られた印象派の画家を列挙してみるとモネ、ミレー、マネ、ゴッホ、クールベ、ルノワール



マネ
笛を吹く少年



ゴーギャン
果物を持っている女



ルノアール
水遣りの女の子



マチス・ダンス
エルミタージュ

ドガ、ロートレック、ゴーギャン、セザンヌ、コロー、ピサロ、シスレー、スーラー等の名が頭に浮かんでくる。

喧噪のパリを抜けだし車で1時間も走ると、のどかな田園風景が果てしなく続くが、ある時パリの郊外にあるバルビゾン村に案内された。この村は印象派画家の拠点の一つでありミレーはじめ名だたる画家達がこの村に住み、自然を相手に作品を制作したのである。彼らはバルビゾン派と呼ばれている。



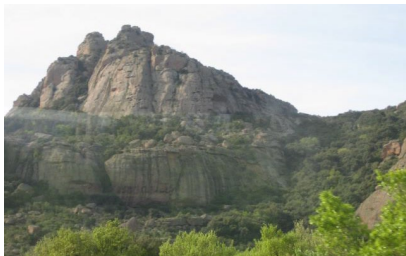
バルビゾン村のミレーの家

村を貫くそう広くもない通りに面して、変哲もない大きな農家のような家に案内された。そこは巨匠ミレーのアトリエであった。小さな村をはずれるとミレーの描いた落穂ひろいや晩鐘に描かれている風景そのままが果てしなく広がっている。



ミレー 落穂ひろい

バルビゾン派のジャン・フランソワ・ミレー（1814年～1875年）は、パリから住居を移し亡くなるまで27年間ここバルビゾンで数々の名画を制作したのである。代表作は落穂拾いや晩鐘である。初めて訪れた著名な画家のアトリエだが、ミレーの家は外観も家の中も意外に質素だったという記憶がある。第一バルビゾン村自体が華やかなパリには比べようもないが、ひどく小さく質素な田舎、小村と言った趣であった。



サント・ヴィクトール山

南仏エクスアンプロバンスは、ポール・セザンヌ（1839年～1906年）一色の小さな町であるが、町に向かう道すがらセザンヌがよく描いたサント・ヴィクトール山が岩肌をみせ高く聳えている。セザンヌのアトリエは大型の作品を運びだせるよう特別設計のドアであるがその大きさに驚かせられた。アトリエは広く50畳ほ

どあり、北側の窓は光を取り込むため極端に大きなガラス張りで室内に自然光を取り込む工夫がなされていた。セザンヌが絵に描きこんだ皿やシャレコーベ花瓶など使用した小道具がアトリエの棚いっぱい並べられていた。

庭は樹木に覆われ広くゆったりとした気分で散策できる。アトリエを後にして丘を下ると町中にでる。セザンヌが通い詰めたカフェ”ドゥ・ギャルソン“は観光客で満席だった。

余談だが画家たちが憧れ住んだ南仏プロバンス地方は温暖な農村地帯である。以前寒いイギリスか

らプロバンスにあこがれて移り住んだピーター・メイルは「プロバンスの12カ月」を綴り、世界的なベストセラー作家となった。その作品を読みいつかチャンスを見つけプロバンスを訪ねてみたいものだと思ったものである。

ある時歴史学者である東大教授の木村尚三郎先生と食事をしていて、フランスへ行くとしたらどこへ行きたいかねと尋ねられた。プロバンスへ行ってピーター・メイルの家を見てみたいと答えると、木村先生は「世界中から君のような人たちがバスを連ねてやってくるのに閉口して逃げ出したので、もう住んではいないよ」と言われた。

アルルの町に到着した。ここはヴァンセント・ファン・ゴッホ（1853年～1890年）の町と
いい。ゴッホの描いた跳ね橋はすでにはないが、描いた絵と同じ跳ね橋が小さな川にかかっ
ていた。ここから2kmほど上流に残っていた橋を移築したものだそうだ。アルルの市内にはゴッホ



夜のカフェテラス



アルルの女



自画像



アルルの病院の中庭

が親友のポール・ゴーギャン

（1843年～1903年）と喧嘩別れして自分の耳を切って入院しアルルの女でいた病院がある。現在は市のイベント会場となっているが、ゴッホの描いた中庭の樹木や回廊などはそのまま残っていて往時を忍ぶことができる。町中を散策するとゴッホの黄色を基調とした“夜のカフェテラス”が当時のままの姿で今も営業を続け販わっている。



ゴッホ糸杉

ゴッホの描いた糸杉は、気候温暖な南仏だが、冬にはミストラルという冷たい嵐がやってくる。糸杉はミストラルを遮る防風林の役割をはたしている。イタリアなどでは糸杉は墓地でよく目にした。ゴッホは天を衝く糸杉に魅せられたのであろうか。

因みに子供の頃夢中で読み耽った昆虫記で名高いジャン・アンリ・ファーブル（1823年～1915年）もここアルルに住んでいたのだそうだ。

ボルドーへ向かう途中ロートレック（1864年～1901年）の生まれたアルビの村の近くを通った。なだらかな丘の連なる豊かな農村風景といった趣で

ある。

モンサンミシエルを見て午後はジベルニーにあるクロード・モネ（1840年～1926年）のアトリエを訪れた。



モネの庭の池の睡蓮



敷地の花壇



モネの家

ここは陽光まぶしく自然が色濃く残るモネが選んだ地である。下世話な話だがモネはよほどの財産家ではなかったかと思わせるほどの広大な敷地である。そこには百花繚乱の花が咲き乱れ敷地のはずれには大きな池があり睡蓮が沢山浮かんでいた。池の端には緑色の小さな橋が架かっている。

モネは自身の敷地から外へ出かけることなく制作に取り組んだのであろうか。住居は広く美しい花壇に囲まれた2階建てで、イメージは昔の小学校の校舎ほどもある。敷地には大作睡蓮を描いた時のアトリエがある。まるで体育館のような巨大な建屋で現在は様々な記念品やお土産売り場となっていて観光客で賑わっている。

住居にはモネが収集した日本の版画が数え切れぬほど飾られている。見学中ツアー仲間がピカソも金持ちだがモネもすごいねと呟いていた。

大都会パリには印象派の絵画だけを展示するオルセー美術館がある。ここはかつての駅舎であったが改築して今や世界的な美術館である。もし中世の名画を見たいと望むなら近くのルーブル美術館へ向かえばいい。ルーブル美術館の絵画はモナリザはじめずっしりと重々しく歴史を感じながらの鑑賞となる。一巡すると名画に接する緊張もあり正直疲れを覚える。

オルセー美術館は絵そのものが明るく開放的で身近に感じほっと息抜きできる。印象派とは言いえて妙である。